

講演会：『日本の教育再生と創造性』

講演者：小粥幹夫 日本経済大学 特任教授



「光ファイバの実用化に取り組んだ一人の元技術者が、仙台で大震災に遭遇して科学技術の限界、人の繋がりの重要性を痛感し、工学部は文化創造学部たるべしとの師の影響も受け、素人であるが故に見える基本を大切に、教育の基本に迫り、ハーバード大ガッツ教授の手法を使って教育のイノベーションの道を模索するSelfの物語を語り、共感から共創を呼び掛けた。

多様化した生徒を最もよく知る先生が、多様な個々の生徒の学びを支援する仕組み構築をゴールとして紹介。社会の求める「自立、協働、創造」の力に繋がる学びの意欲の基本に迫りながら、中教審の教育改革の論議でキーワードになっている「アクティブ・ラーニング」の意義や具体例を紹介、第Ⅱ部の対話を通じた創造性のワークショップに繋がった。

MOTを学ぶことから始め、創造性に関心を持ち、高校の先生との繋がりに学びの意欲にこだわり、年金生活の中で考えている未来の教育についての思いを、この日は語った。日本創造学会会員に加え一般からの10名を含む36名の参加、充実した中味の濃い議論は、ワークショップや25名参加した懇親会において20時過ぎまで続いた。主体的・協働的な学びは、教育の課題解決に向けた深い学びの方法としてのアクティブ・ラーニングを参加者は実感、教育に止まらない社会改革への思いを共感頂けたでしょう。

その後の中教審の部会も聴講して以下のような可視化図を作成しました。新たな理念の市民への啓発、教育委員会や学校を通じた教員への伝達、研修機関等への浸透は大きな課題で、SNS等の新たな社会インフラを活用するデザイン思考によって、新たな方策を創造する必要があり、日本創造学会が重要な役割の一端を担うスタート点となることを願っています。(記事：会員 小粥幹夫)

ワークショップ：『場を創り、価値を生む』

講師：杉山比呂之 専修大学附属高等学校教諭
講師補助：橋本拓也・吉田亘



「場を創り、場に価値を」をコンセプトに、大学生や社会人の卒業生、地域の方々など、異なる世代と交流をしながら、「コミュニケーション能力」「ファシリテーション」「チームビルディング」「傾聴」といったことを、参加者全員で学ぶ「チーム作り講座」。

今回は高校での授業実践をもとに、橋本拓也・吉田至や現役高校生の協力を経て、参加者全員で場を創り、場に価値をもたらすプログラムを二部構成で展開した。前半はワークショップを創造するうえで大前提となる、テーマとゴールの「みえる化」とチェックインから開始し、グランドルールを提示した。グランドルールは、①場を創り、場に価値を、②お互いの違いを受け入れてお互いを尊重して学び合う、③本日のこの場で一緒になった縁を大切に、という3点を設定した。

自己紹介はアイスブレイキングの要素を含めて、汎用性のある「四つの窓」というプログラムを実施した。ワークⅠは、「マグネットテーブル」(各自の関心のあるテーマを用紙に記入し、それを持ちながら参加者同士が互いの関心を共有し、関心が近い人同士がマグネットのように集まる)を応用して、「暗闇マグネットカフェ」を実施した。関心のあるテーマを記入後、その用紙を身体に貼り、アイマスクを装着。その後、特定の参加者がアイマスクをとり、その参加者が自分の関心あるテーマと近い参加者をブラインドウォークの要領で座席まで誘導してチームを作り、ワークⅠの感想を共有した。

後半は、「烈車戦隊トッキュウジャーからみるチーム」というレクチャーからスタートした。チームにおける役割や色の持つイメージ、またシックスハット法などを解説したうえで、ワークⅡの「未来新聞」づくりへと移った。ワークⅠのチームで、「未来の理想の日本の教育」についての新聞を作成し、その後プレゼンを行った。平均年齢がいつものサロンより若かったせいもあり、プレゼンは非常に有意義なものとなり、また各チームがクリエイティブな未来の教育を創りあげ、その場に価値をもたらした。ただ、最後の振り返りの時間が十分確保できなかったことは残念で、次回以降機会があれば再挑戦させていただければ幸いである。(記事：会員 杉山比呂之)